

子どもの描画におけるにおいの表現の研究

奥 美佐子

神戸松蔭女子学院大学教育学部

Author's E-mail Address: m-oku@shoin.ac.jp

Examining How Children Express Odor in Their Drawings

OKU Misako

Faculty of Education, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究は嗅覚から取り入れた情報がどのように描画に変換されるのかを明らかにし、嗅覚特有の描画表現や変換方法を見出すことを目的としたものである。本稿では5歳児を対象として「においを描く」実践を実施し、色と表現形式から子どもの描画を検討し、描画におけるにおいの表現の仕方、においの種類と色彩のイメージの関連、においをイメージして選択された色の特徴、においを描くときの表現形式について分析した。結果として、においからイメージする色の選択と、においをイメージした描画表現に使用する色とは、選択する色が異なり、においを描く実践では具体的に存在するものの視覚からの情報が優先されることがわかった。

This study sought to ascertain how olfactory information is converted to visual information expressed in the form of drawing, specifically identifying the common features of expression in drawings and the process of conversion. Drawings of “smells” by 5-year-old children were analyzed in this regard. The association between odor type and image color was examined in terms of the characteristics of the colors chosen for the images representing certain odors and the form of expression of odors in the drawings. Results revealed that the colors chosen for images representing certain odors are different from the colors chosen and used to express odors in drawings, indicating that visual information is prioritized.

キーワード：子どもの描画と色彩、五感と表現、においを描く、においと色

Key Words: children's drawings and colors, association between the five senses and expression, drawing odors, odors and colors

I. はじめに

視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚のいわゆる五感は脳がその機能を司っている。脳科学の分野では、五感に驚異的な働きをしていることが分かってきている。五感の情報収集能力は生理機能に基づいたものであり、人間のこれらの知覚機能は無意識のうちにもおびただしい情報を取り入れているといわれる。無意識のうちに取り入れた情報は生活的な場面の判断や、生命の危機回避などに直結した情報として機能している。表現領域において豊かな感性という文言が使用されているが、感性とは時間と空間に本質的に制約されている物質的対象からの刺激を感官を媒介として受入れる精神の認識能力で、これと対置される知的認識能力に素材を提供する。またはこのような作用の総体をもいう。感官＝視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚の五感を媒介として情報を取り入れているのであり、五感感性を形成する基盤となるものでもあるといえる。

五感を媒介として受け入れた情報が人に認識され、どのように表現へと結びつくのだろうか。芸術表現の世界では感受された情報が直接的に表現として湧出するケースは十分に認め得ることであり、ましてや乳幼児の表現の世界においては直線的な表現への道筋をたどる場合を容易に推測できる。子どもの成長発達の面や個人差などの条件はあるが、日々の乳幼児の表現の観察からは、それ以外にイメージ形成と表現への道筋に段階的に見える試行の姿があるのも事実である。そこには知覚機能から無意識に取り込まれた情報の意識化があると考えられる。子どもは五感から取り込んだ情報を表現のプロセスのどの段階で、どのように意識化しているのだろうかという疑問に行き着く。

幼児教育の現場では子どもたちが日々の経験を描画に残すことが多々あり、それらは子どもたちが新しい探求と認識の経過を探るデータを提供してくれている。本研究の実験園であるK保育園では造形活動が保育の中で多様に組み込まれ、子どもの育ちに意味ある位置を占めている。Ⅳ期(1～3月期)の5歳児の活動で、西寺公園へのお散歩で自作したカメラを各自持って出かけ、興味あるものを写すことになった。写したつमりの写真の内容は園に帰ってから画用紙に描き、クラスで共有した。子どもたちが写した＝描いた絵の解説を聴くと、「西寺公園へいったよ。カラスがお空を飛んでた」「犬がいた。おばさんとお散歩してたよ」「ピューピュー風が吹いてた」(図1)というもので、お散歩の行程で出会った人やもの、経験したことであった。写真には視覚的な記録としてだけではなく自分との関係や目に見えない風の音や強さを絵に留めようとした痕跡があった。視覚優位の表現である造形的な表現活動ではあるが、子どもが取り込んだ情報は多様な感官から取り込んだものであり、ものやこと

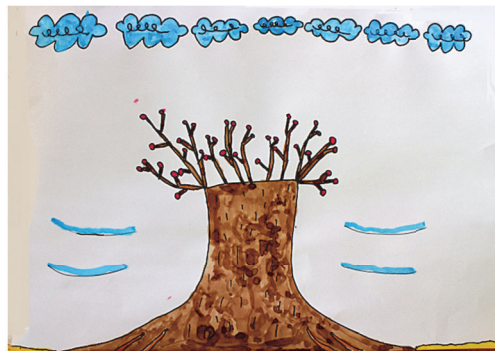


図1 「かぜがピューピュー吹いてたよ」
風の音と体感は、4本の弧線で表された。見えないものは記号化されることも多い。

を平面の描画に置き換えて表現していた事例である。

上記の事例を五感という知覚機能の観点から見ると、子どもたちは広い空間そのものや空間に起こる出来事を視覚、聴覚、触覚などを中心に全身の身体感覚で捉え、経験した空間における情報を取り込んでいることを確認することができる。鑑賞者は、描画による表現は取り込まれた情報と情報の描画への変換結果を、描画と子どもの言語によって確認することができる。五感と表現の関係を探求するにあたり、視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚のいわゆる五感を個別に扱うことは本来困難であり、これらの感覚器官は相互に関連していることから、出現した表現が単体としての感覚器官のみを取り上げて、表現との関連を見出すのは困難だといえる。そのような状況でも出現した表現が特定の感覚器官に精神を集中させて感じ、表現しようとした結果としてみることは可能なのではないだろうか。

筆者は、人が造形的な表現をするときに諸感覚器官から無意識に取り入れた情報を意識的に処理することや、表現に結び付く情報を、知覚機能を意識的に働かせて情報化することが表現にリンクする、または表現を豊かにする一つの方法だと考えている。美術的な表現は視覚が優先的な芸術ではあるが、情報源は意識、無意識を問わず諸感覚器官を媒介として大量に取り入れられた情報から構成されている。保育・教育における造形活動や美術表現における構想・活動のプロセス・作品における情報の意識化こそ、「感性を磨くこと」や「表現への挑戦」「表現の構想」「イメージの共有」「活動や造形表現の相互理解」に繋がる要因になろう。

五感と表現の関連を調べる研究では、単体の知覚機能を意識的に取り上げ、五感のなかの単体の感覚と描画表現を関連付けた実践を通し実証的に研究を進める。拙稿「音と色をどのように表現するか」(神戸松蔭女子学院大学紀要 NO.3 2015)、「子どもの音の表現と読み取りの研究」(神戸松蔭女子学院大学紀要 NO.5 2017)では聴覚を取り上げ、音に対応する色のイメージには、高音部・低音部にある程度の共通した色のゾーンがあり、音の種類や質と色の選択にも共通した色のゾーンがあることを確認した研究であった。

嗅覚からの実践では日本保育学会第73回大会で発表した「においの色を探る 2—子どもがにおいの色を描く試みから—」で、描画に色のゾーンを確認することができなかったことを報告したが、本稿はこれを基にその要因を分析し、嗅覚からの描画表現の特徴及びにおいと色の関係性についての特性を明らかにすることを目的とするものである。¹⁾

II. においと表現の関係

1. 嗅覚の特性

人の感覚器官は受精して2か月には発達し始めるといわれ、五感には、触覚→聴覚→味覚・嗅覚→視覚の順に形成される。嗅覚は味覚とともに化学物質に対して反応を示し、生命や種の存続にかかわる感覚であり、嗅覚の探知能力は危険因子に対しての忌避行動を促し、生殖可能な同種や異性を検知する感覚でもある。

ローレンス・D・ローゼンブラムは著書『五感の驚異』で人の個体は独特のにおい、「においの標識(サイン)」を持ち、5歳ぐらいまでに兄弟のにおいが分かるようになり、これらは人間の好みや配偶者の選定にもかかわるといふ。²⁾ 加えてにおいは体験記憶に感情を織り込

む、においで危険を察知できる、など個別のイメージの形成や危機回避につながる感覚器官としての特性をもつ。

人はにおいの探知という能力と、においをかぎ分ける感受性を備えている。嗅覚はしばしば味覚と一体化して感じ取られるので、「風味の80%はにおいによってもたらされている」³⁾といわれているにもかかわらず、美味しそうな食事やデザート香りや甘い香りは「いいにおい」、強烈な臭いや腐臭は「くさい」という表現で括られることが多く、においの言語化に慣れていないといえる。無臭覚症のように、においの機能を失うと人間の固有のにおいを感じなくなると、人にとって心が満たされない生活を送ることになるだろう。

2. 嗅覚と視覚

人の感覚は五感の中では視覚優位だといわれている。造形芸術は視覚芸術であることから表現は視覚的であることが軸となっているので、視覚の優位性には否定的ではないが、表現メディアとしての視覚優位以前の、イメージのファイリングとその再構成、あるいは新しいイメージの創造の段階においては、諸々の感覚器官からの情報摂取が基盤にあることは言うまでもない。特に現代社会では人間の視覚情報への依存度が高まり、人工的なにおいの積極的な提供などに見られる嗅覚のコントロールとも捉えることができる状況や、その背景にある無臭の時代といわれる「嗅覚の抑制や劣化という認識」⁴⁾は、情報の言語化、文字化、もしくはダイレクトな映像への依存度が極めて高くなっていることに起因しているとも考えられる。

3. においと色彩の関係

(1) においを色で表す

においをイメージして色彩を選択しその傾向を特定する25歳～55歳の女性を対象とする研究から、においをもつ色のイメージを探ったところ、春原吉美は香りと色の共感覚性を色度の観点から以下のように報告している。「色度」とは、明度を除いた光の色、色相と彩度を数量的に表示したもののことをいう⁵⁾。

① 香りの嗜好性と色度の関係

■清潔・やさしい・甘い、のにおいをイメージする色の嗜好特性において、「赤」の値が有意に高く、「青」の値が有意に低い。「赤」の中での実際の色では、「ピンク」の色が多く選ばれた。

② (製品) カテゴリーイメージと色度の関係

- スキンケア：鮮やかな色のイメージではない。赤・黄色寄りで、緑・青の色度は著しく低い。実際の色はベビーピンク、シャーベットオレンジ。
- ヘアケア：赤の色度が高く、選択色で多いのは濃い目のピンク。
- ボディーソープ：スキンケアと近似であるが、選択色の色度はより鮮やか。
- 洗濯用洗剤：青の色度が有意に高い。選択色も青が多い。
- 台所用洗剤：黄色の色度が有意に高い。選択色も黄が多い。レモン、オレンジなどの柑橘系。

③ 香りの特性と色度の関係

- 清潔：緑の色度が有意に高い。赤と黄の色度が有意に低い。
- やさしい：赤の色度が有意に高い。緑と青の色度が有意に低い。
- 甘い：赤と黄色の色度が有意に高い。緑と青の色度が有意に低い。

以上、清潔＝青系・緑系、やさしい・甘い＝赤系・黄色系の色度で、実際の色彩選択では、特にやさしい、甘いではパステルカラーの選択が多いという結果は、本研究における「いいにおい」のカテゴリーで、実際の色彩選択の比較対象とすることができる。

(2) 描画と嗅覚の関係

においをイメージで色彩選択する場合と、描画表現において実際に使用する色彩とは、共通である場合もあるが表現上の要因が重なり、異なる場合があると考えられる。清田哲男が小学4年生を対象にした「嗅覚と触覚が絵画表現に及ぼす影響についての基礎研究」⁶⁾で実践した事例では、パイナップルを描くにあたって対象児を嗅覚のみからアプローチするグループと、触覚のみからアプローチするグループの描画表現には色と形に関して差異が出現した。結果として色彩の使用数は葉以外は触覚グループが勝り、形態については嗅覚グループは記号化したものとなりやすく、触覚グループは細部に特化した表現が出現することから、嗅覚と触覚からのアプローチによる相互作用が必要と結論付けている。においから触発された色や形の出現より記号的な表現の出現が、知的リアリズムの最中にいる幼児にとっても表現する形体に何らかの変化があるのだろうか。

Ⅲ. においを描く実践

1. 本実践の目的

本研究は嗅覚から取り入れた情報がどのように描画に変換されるのかを検討し、嗅覚特有の描画表現や変換方法を見出すことを目的としたものである。本実践では5歳児を対象として「においを描く」実践を実施し、色と表現形式から子どもの描画を分析して、描画におけるにおいの表現の仕方としてにおいの種類と色彩のイメージの関連及びにおいを描くときの表現形式について、においをイメージして選択された色の特徴等について明らかにする。

2. 調査の概要

調査の概要は以下のとおりである。

- (1) 調査期日：2019年8月22日（木）
 - (2) 調査対象：京都市内K保育園5歳児26名。調査後の聞き取りが十分できるように、前半グループ13名（男児4名・女児9名）、後半グループ13名（男児6名・女児7名）に分ける。
 - (3) 調査方法
- ①前半、後半2グループともに、同じ条件で実践を進める。保育は筆者が導入から最後まで進め、担任の保育者と主任保育士または幼児のチーフ保育士がサブとして入り、合計3名の保育者が実践にかかわり、音声と写真で活動のプロセスと結果を記録し、記録等の分析

は実践を担当した4名の確認の基で行う。

②準備物等

- ・パス（16色入り）は子どもの個人もちのパス各1ケース
- ・絵の具は18色準備し、共同で使用する。原色・清色系6色、パステル系明色6色、暗色・濁色系6色。色は保育者が溶いておく。筆も共同で使用。
- ・描画材はパス、絵の具単独でも併用でも可とする。パスと絵の具を準備したのは、子どもによって描きやすい描画材が違うことがあり、選択できるようにするためである。
- ・画用紙は白1/16切りを1人2枚
- ・画板

③実践の順序

「いいにおい」と「いやなにおい」はどんなにおいかを保育者が子どもたちと応答する。



「いいにおい」と「いやなにおい」を描く。

いいにおいから描き始めて、個々に完成したらいやなにおいを描く。

④描画の聞き取り

実践に参加した保育者2名、筆者の計3名が分担して、1対1で子どもから描いた絵についての解説を聞き取る。聞き取りにおいては、各々の描画を見ながらそれぞれで「どんなにおいを描いたのか」「何においか、どの色（どの部分）がそれを表しているのか」など、具体的に答えられるものについては詳しく聞く。

⑤「いいにおい」「いやなにおい」がする色の選択

使用した絵の具の色見本18色を一人一人に提示して、いいにおいの色・いやなにおいの色を、言葉または色見本への指差しで聞く。理由についても可能な限り聞くこととする。

3. 結果

(1) 描画からの検討（子どもの絵と聞き取りから）

2グループの描画が終わった後、子どもたちから描いた「いいにおい」と「いやなにおい」について、子どもから描いた絵についての解説を聞き取る際に、具体的に答えられるものについては詳しく聞いた。

表現及び聞き取りのエピソードが特徴的な描画を図2に示した。

① 描画に使用した色

実践で描画材を併用したのは16名、パスのみは8名、絵の具のみは2名であった。いいにおいの色といやなにおいの色の描画で使用した色と、使用数を以下に挙げる。以下の（ ）内は使用回数であるが、使用した色数が幼児の総数を超えているのは、描いたモチーフの種類によって同色が複数カウントされたためである。

「いいにおい」の色では、上位から赤（32）・緑（30）・桃色（24）・紫（19）・黄（15）・茶色（15）・黒（15）・橙（13）・こげ茶（12）・水色（12）・黄緑（11）・クリーム色（10）・青（9）・薄橙（8）・薄紫（8）・薄緑（8）・白（5）・黄土色（4）・オリーブグリーン（3）・灰色（2）の

順で使われ、桃色以外は純色、清色など鮮やかな色合いが選択された。筆者が実施した学生による調査⁷⁾の折に、いいにおいからイメージする色としてパステルカラーの選択が多かったことから同様の予想をしていたが、明度の高い色は下位に並んだ。赤と緑、桃色が1、2、3位にあるのは、苺、リンゴ、桃などの果物とその葉っぱが描かれた結果であり、紫、茶色も同様であった。(図2、図4参照)

「いやなにおい」の色では黒(30)・こげ茶(18)・赤(15)・茶色(15)・薄橙(14)・緑(12)・灰色(10)・水色(8)・黄土色(8)・黄色(7)・桃色(6)・紫(5)・黄緑(4)・薄緑(4)・青・クリーム色(3)・白(3)・橙(2)・薄紫(0)・オリーブグリーン(0)の順で使われた。いやなにおいの色では黒がこげ茶の約1.7倍の使用数で1位、灰色が上位に来ていることが特筆

【子どもの描画 前半グループ 6/13人】

* 「いいにおい」上段と「いやなにおい」下段



図 2-1



図 2-2



図 2-3



図 2-4



図 2-5



図 2-6

【子どもの描画 後半グループ 6/13人】

* 「いいにおい」上段と「いやなにおい」下段



図 2-7



図 2-8



図 2-9



図 2-10



図 2-11



図 1-12

される。赤についてはクラスで飼育していたカニの水槽のにおいが臭いという応答が導入時に子どもから多くあり、結果カニのイメージで赤が多くなった。(図2、図4参照)

子どもからの聞き取りで使用した色についての解説では、いいにおいでは、赤と緑を使った苺を指して「苺はいいにおい」、「黒・橙・薄紫はフルーツにないから使わない」、「海(水色で描く)塩がたっぷり入っていて塩のにおい大好き」などである。いやなにおいでは、「うんこくさいし、茶色、カニくさいしピンクの形を変えて描いた。嫌なにおいの形は赤を重ねて描いた」「ゴミが広がったところ、畳のにおいや、嫌いなにおい描いた、魚のうろこは黒。クリーム色は鶏肉、鯉に餌をあげた時カラスが来て嫌やったし。腐った玉ねぎの色は黄土色。犬のうんち、泥のにおいは茶色。たばこは吸った後の焦げたところ臭いし、黄土色」などで

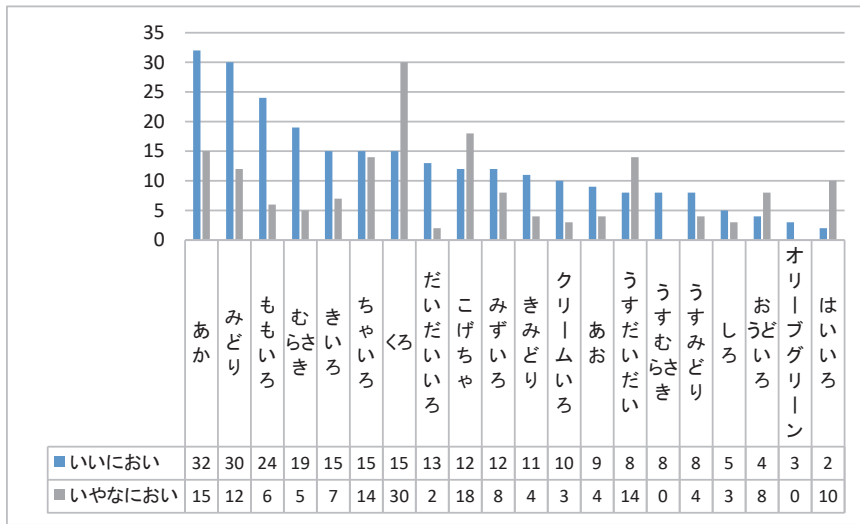


図3 子どもが描画で使用した「いいにおい」と「いやなおい」の色

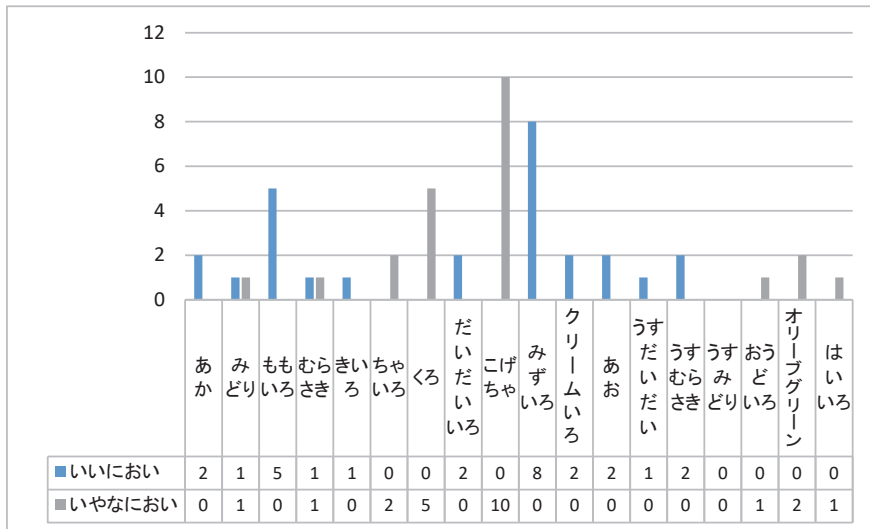


図4 子どもが選んだ「いいにおい」と「いやなおい」の色

ある。

薄紫とオリーブグリーンを除いて、いいにおい、いやなおいの描画に使用された。また、どの子どもの描画にもイメージしたにおいの発生源と使用した色には意味があることがわかる。

② 表現形式

26名中25名、96%の子どもが具象的な表現をした。1名(6.4歳 女児 図2-1参照)のみ、色面で表現した。使用した色は、いいにおい：水色・黄緑・紫・桃・薄緑・赤・橙・黄・青・

こげ茶・クリーム、いやなにおい：黒・桃・緑黒・灰色・こげ茶・黄土・黄・クリーム色であった。色面で描いた理由は、「初めから使いたい色が決まっていた」ということである。それぞれの色の説明は、「いいにおい：フルーツがはじけている 飲み物がこぼれていいにおいが紙についたところを描いた。ぶどう・メロン・もも・オレンジ・いちご・マンゴー・チョコ・ブルーハワイ・ソーダ、まっちゃん・メロンクリームソーダ・マスカットバニラ。黒・薄紫・うす橙はフルーツにないから使わない」、「いやなにおい：ゴミが広がったところ、畳のにおいや、嫌いなにおい描いた、パス（ピンク）魚のうろこ（黒）クリーム（鶏肉）鯉に餌をあげた時カラスが来て嫌やったし。腐った玉ねぎの色（黄土色）犬のうんち、泥（茶色）たばこ（黄土色）吸った後の焦げたところ臭い」という理由であった。

使用した色の結果からも分かるように、子どもがイメージしたにおいの発生源はほぼ具体的なものであった。対象児が5歳児であるということから、描画の発達過程からすると図式的ではあるがそれらしい形態を描くことができる時期である。色面での表現は表現した子どもの意図によるものであることがわかる。

③ イメージしたにおいのモチーフ

子どもが描いたモチーフを種類別に分類すると、いいにおいでは、食べ物57（フルーツ25・飲料6・食事6・菓子やデザート9）、花や植物11、その他2（香水、海）であった。

いやなにおいでは、排泄物32（うんち21、おなら11）、生活臭25（ゴミ8、タバコ7、靴下7、畳3）、虫・カニ等15、その他17（泥、雑巾、ばい菌、魚等）であった。いいにおいの発生源は、食べ物系が81%を占め、花や植物のにおいが16%、その他の中にお母さんの香

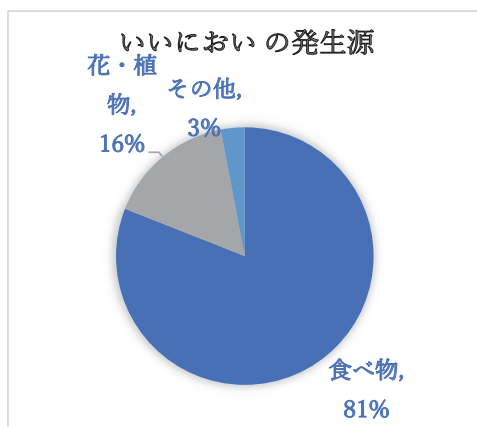


図5 いいにおいの発生源

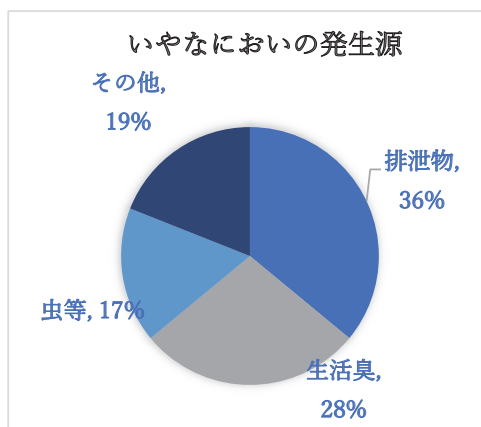


図6 いやなにおいの発生源

水などがあつた。いやなにおいは排泄物への興味関心が高いことがわかる。ほとんどが日々の暮らしと関係があるにおいであつた。（図5、図6参照）

色の使用回数に差はあるが前述の2色以外はいいにおいにもいやなにおいにも同じ色相の色を重複して使用していた。これに比してにおいのイメージで選択した色は緑と紫以外は重複していなかった。紫系と緑系は描画では抹茶アイスや葡萄が好きなどのいいにおいの描画で、いやなにおいで選択はなく重複していない。においのイメージによる選択では濃い緑のほうがおいしそう、紫は解説なしであり、いやなにおいで重複したが、紫は偉い人の色だから、緑は大饗へびが緑だったとの解説があり、どちらも自分の体験的なものや嗜好からの選択であり、この2系統の色相についての特徴は見いだせていない。

においを描く場合の色彩選択には、選択する色のゾーンが確認できないが、においをイメージしての色彩選択にはいいにおいでは水色を筆頭とし青に至る寒色系、桃色から赤・黄色に至る暖色系など明色、清色が選択され、いやなにおいでは黒、褐色系、濁色系が選択され、いいにおいからイメージする色のゾーンと、いやなにおいからイメージする色のゾーンが確認できた。

子どもがにおいをイメージして選択した色の中で「いいにおいのいろ」を、春原が「香りと色の共感性－色度の観点から－」で導いた結果と対照してみる。

香りの特性と色度における以下3点、

- 清潔：緑の色度が有意に高い。赤と黄の色度が有意に低い。
- やさしい：赤の色度が有意に高い。緑と青の色度が有意に低い。
- 甘い：赤と黄色の色度が有意に高い。緑と青の色度が有意に低い。

に照らして、本研究でいいにおいの色として最も選択が多かった水色は清潔、2位の桃色はやさしい、3位以下続く赤から黄色への流れは甘い香りをイメージする色として、選択の幅は子どもの感覚も大人と同様であるのではないかと考えられた。

2. 視覚との関係

5歳児を対象としたにおいを描く実践では、いいにおいもいやなにおいも、5歳児の描画表現ではあるが96%が具象的に描かれ、具体物の色彩が使用された。嗅覚と視覚は連合学習であるといわれるように、ここからも嗅覚と視覚からの情報との関連は深く、描画表現には視覚の影響が認められる。子どもたちの嗅覚からの描画は、日常彼らが描く描画の形式と特に違いが認められなかった。

五感から情報を摂取するときに、視覚的な情報と他の四つの感覚器官からの情報はセットでファイルされていると考えたほうが矛盾がない。子どもを対象として今回と同様表現形式を線や抽象形に限らずに実施した、音を描く研究では、具体的なものをイメージして具象的に表現した子どもが41%、音から感覚的に色や線、形態を使って抽象的な表現をした子どもが39%であった。4歳児が対象であったことから、発達的な傾向が関連したものでどちらか判別がつきにくいものが20%あったが、色面や線で表す抽象的な表現がにおいの描画表現より出現した割合がかなり高かった⁸⁾。

本実践のにおいからイメージした色の選択についても、子どもの解説からも視覚的なイメージから具体的な状況やものを想像して色を選択したことがわかる。特にいいにおいの色の選

択では、イメージした具体的なものが自分が好きな色や心地よいと感じる色を選ぶ傾向が強いと思われ、描画におけるおいの発生源を描いたものとは異なったのではないだろうか。いやなにおいは「くさい」という言葉に集約されており、対象児が5歳児だということもあり、おいの言語化に慣れていないとの指摘に得心するものである。

V. おわりに 五感の意識化と表現への展開

本研究を通じてにおいと描画表現の関係については以下のことを確認した。

■においを描く実践では、

・5歳児を対象としたおいの描画の特質は、色彩については具体的なもののイメージから色が決定されることから、いいにおいといやなにおいで描画で使われる色のゾーンは明確でない。

・5歳児は嗅覚からイメージして描く場合、ほとんどの子ども（96%以上）がおいの発生源を具体的にイメージして、その発生源を具象的に描く。

■いいにおいの色、いやなにおいの色の選択では、

・いいにおいといやなにおいのイメージで色を選択した場合、それぞれのにおいの色のゾーンが確認できる。いいにおいは清潔なイメージを有する水色・青系、明度が高く暖色系の桃色・赤から黄色へのゾーンであり、いやなにおいは黒・こげ茶、濁色系の明度や彩度が低いゾーンに分類することができる。

・子どもがイメージするのは、好きな色、または具体的なものである。

■共通して言えることは、

・描画に使用した色及びにおいのイメージで選択した色は、それぞれに意味があり説明できる。

・子どもが描いたり選択したりするにおいは、身近な日常のにおいである。

・子どもが描いたり選んだりするにおいの色は、視覚との関連が深い。

嗅覚からのイメージが日常生活と密接に関連していることは、子どもの発語からも理解できる。また、保育者による子どもの日常のにおいに関する反応の記録からは、おいに敏感な子どもとそうでない子どもの表現の幅の違いや、保護者の嗜好や日々の応答など家庭環境からの影響があることが記述から読み取れる。

聞き取りの中での一人の子どもが、「フルーツ：甘いにおいが大好き。お花：お花がいっぱい咲いていたところにいた時、いいにおいがした。桃：丸かじりしたときめっちゃおいしかったいいにおいがした。アイス：甘い味がする、おいしいからかな。苺：苺狩り行ったときに甘かったいいにおいがした。マンゴー：見た目がおいしそうやし、いいにおいがする。チョコ：甘い、砂糖入ってるし。ミカン：ばあちゃんちで食べたときおいしい。スイカ：おいしい。」と解説した後で、この子どもが、「味とにおいはつながってるかもしれん」という言葉を発した。

この子どもの言葉は、感覚器官は相互に関連していて単独では成り立っていないという、一つのモチーフに対して、視覚と嗅覚、味覚と嗅覚など、五感が相互に関連していることを

子ども自身が発見し、確認した発語として重視したいものである。

イタリアのレッジョエミリア市で実践されているアートを軸に据えた教育では、空間として組み込まれたミニアトリエやそれぞれの部屋のスペースに窓やライティングデスク、ほの暗い空間とライトなど光の変化のあるスペースを設けている。日本の幼児教育機関ではあまりみられない環境であるが、これは新しい探求と認識の機会に誘う目的を持っているという。

幼児教育における表現分野においては、取り入れた情報を感性と表現のエリアで機能させるために、日常生活や自然環境とのかかわりの中で感覚機能を働かせ豊かな感性を養うことが重要である。五感の意識化と表現への展開の基盤は日常との関係にあることから、レッジョエミリア市の実践のように、新しい探求と認識の機会となり得る環境を創り、それらへの気付きの機会を充実させ、表現の時空へ導くなど、子どもを取り巻く環境としての大人が造形環境としてすべきことがここから見えてくるのではないだろうか。

【引用・参考文献】

- 1) 奥美佐子著『においの色を探る 2—子どもがにおいの色を描く試みから—』第73回日本保育学会発表論文集 2020年 pp.449-450
 - 2) ローレンス・D・ローゼンブラム著 齋藤慎子訳『最新脳科学でわかった五感の驚異』講談社 2011年 pp.112-113
 - 3) ローレンス・D・ローゼンブラム著 齋藤慎子訳 前掲書 2011年 p.117 参照
 - 4) 伏木亨編『匂いの時代』ドメス出版 2018年 p.58
 - 5) 春原吉美著「香りと色の共感覚性—色度の観点から—」日本官能評価学会誌 14巻2—2号 2010年 pp.109-113
 - 6) 清田哲男著「嗅覚と触覚が絵画表現に及ぼす影響についての基礎研究—小学生のパイナップル描画の一考察—」岡山大学大学院教育学研究科研究抄録第160号 2015年 pp.51-57
 - 7) 奥美佐子著「においの色を探る —においを描く試みから—」日本保育学会発表論文集 2019年 pp.477-478
 - 8) 奥美佐子著「音を描く試み1—暮らしの中の音を描く—」日本保育学会第70回大会発表論文集 2017年 p.569
- ・奥美佐子著「音と色をどのように表現するか」神戸松蔭女子学院大学紀要 人間科学部編 NO.3 2015年 pp.49-59
- ・奥美佐子著「子どもの音の表現と読み取りの研究」神戸松蔭女子学院大学紀要 人間科学部編 NO.5 2017年 pp.53-65
- ・奥美佐子著『3・4・5歳児の造形あそび』ひかりのくに 2017年

- ・加藤博子著『五感の哲学』KK ベストセラーズ 2016年
- ・倉橋隆、福井寛、光田恵著『においとかおりの本』日刊工業新聞社 2011年
- ・グラバア俊子著『五感の力ー未来への扉を開く』創元社 2013年
- ・斉藤孝、山下柚実著『五感力を育てる』中央公論社 2002年
- ・佐藤学監修『驚くべき学びの世界』ACCESS CO.LTD 2011年
- ・篠原資明著『五感の芸術論』未来社 1995年
- ・『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉』チャイルド本社 2017年

(受付日: 2020. 12. 10)